

『正法眼藏抄』口語訳の試み

——仏性——

伊藤秀憲

第七段

第十四祖竜樹尊者、梵云那伽闍刺樹那、唐云竜樹、亦竜勝、亦云竜猛。西天竺國人也。至南天竺國。彼國之人、多信福業。尊者為說妙法。聞者通相謂曰、「人有福業、世間第一。徒言仏性、誰能覩之。」尊者曰、「汝欲見仏性、先須除我慢。」他人曰、「仏性大耶小耶。」尊者曰、「仏性非大非小、非廣非狹、無福無報、不死不生。」彼聞理勝悉廻初心。尊者復於坐上現自在身、如滿月輪。一切衆會、唯聞法音、不覩二師相。於彼衆中、有長者子迦那提婆、謂衆會曰、「識此相否。」衆會曰、「而今我等目所未見、耳無所聞、心無所識、身無所住。」提婆曰、「此是尊者現仏性相、以示我等。何以知之。蓋以無相三昧形如滿月。」仏性之義、廓然虛明。言訖輪相即隱。復居本座、而說偈言、「身現円月相、以表諸仏體、超脫解用辨非聲色。」

しるべし、真箇の用辨は声色の即現にあらず、真箇の説法は無其形なり。尊者かつてひろく仏性を為説する、不可数量なり。⁽⁶⁾しばらく一隅を略舉するなり。汝欲見仏性、先須除我慢とこそ為説の宗旨、すごさず辨肯すべし。見はなきにあらず、その見これ除我慢なり。我もひとつにあらず、慢も多般なり、除法また万差なるべし。しかあれども、これらみな見仏性なり、眼見目覩にならふべし。仏性非大非小等の道取、よのつねの凡夫二乗に例諸することなれ。偏枯に仏性は広大ならむとのみおもへる、邪念をたくわへきたるなり。大にあらず小にあらざらむ正当恁麼時の道取に罣礙せられむ道理、いま聽取するがごとく思量すべきなり。思量なる聽取を使得するがゆへに、しば

らく尊者の道著する偈を聞取すべし。いはゆる、身現円月相、以表諸仏体なり。すでに諸仏体を以表しきたれる身現なるがゆへに、円月相なり。しかあれば、一切の長短方円、この身現に學習すべし。身と現とに転疎なるは、円月相にくらきのみにあらず、諸仏体にあらざるなり。愚者おもはく、尊者かりに化身を現せるを円月相といふとおもふは、仏道を相承せざる儻類の邪念なり。いつれのところのいづれのときか、非身の化現ならむ。⁽¹⁰⁾まさにしるべし、このとき尊者は高座せるのみなり。身現の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとありしなり。^{*}この身、これ円月相現なり。身現は方円にあらず、有無にあらず、隱顯にあらず、八万四千蘊にあらず、ただ身現なり。円月相といふ、這裏是甚麼処在、説細説麤月なり。この身現は先須除我慢なるがゆへに竜樹にあらず、諸仏体なり。以表するがゆへに諸仏体を透脱す。しかあるがゆへに仏邊にかかはれず。仏性の満月を形如する虛明ありとも、円月相を排列するにあらず。いはんや用辨も声色にあらず、身現も色心にあらず、蘊処界にあらず。^{*}蘊処界に一似なりといへども、以表なり、諸仏体なり。^{*}これ説法蘊なり、それ無其形なり。無其形さらに無相三昧なるとき身現なり。一衆いま円月相を望見すといへども、目所未見なるは説法蘊の転機なり、現自在身の非声色なり。即⁽¹¹⁾隱即現は、輪相の進歩退歩なり。復於座上、現自在身の正当怎麽時は、一切衆会、唯聞法音するなり、不覩師相なり。尊者の嫡嗣迦那提婆尊者、あきらかに満月相を識此し、円月相を識此し、身現を識此し、諸仏性を識此し、諸仏体を識此せり。入室瀉餅の衆たとひおほしといへども、提婆と齊肩ならざるべし。提婆は半座の尊なり、衆会の導師なり、全座の分座なり。正法眼藏無上大法を正伝せること、靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。竜樹未廻心のさき、外道の法にありしこの弟子おばかりしかども、みな謝遣しきたれり。竜樹すでに仏祖となれりしことは、ひとり提婆を附法の正嫡として、大法眼藏を正伝す。これ無上仏道の單伝なり。しかあるに、潛偽の邪郡、ままに自称すべく、われらも竜樹大士の法嗣なり、論をつくり義をあつむる、おほく竜樹の手をかれり、竜樹の造にあらず。むかしすてられし群徒の、人天を惑乱するなり。仏弟子はひとすぢに、提婆の所伝にあらざらんは竜樹の道にあらずとするべきなり。これ正信得及なり。しかあるに、偽なりとしりながら稟受するものおばかり。謗大般若の衆生の愚蒙、あはれみかなしむべし。

迦那提婆尊者、ちなみに竜樹尊者の身現をさして、衆会につげていはく、此是尊者現仏性相、以示我等、何以知之、

蓋以無相三昧、形如滿月、仏性之義、廓然虛明なり。いま天上・人間、大千法界に流布せる仏法を見聞せる前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は仏性なりと。大千界には、ただ提婆尊者のみ道取せるなり、余者はただ仏性は眼見・耳聞・心識等にあらずとのみ道取するなり。身現は仏性なりとしらざるゆへに道取せざるなり。祖師のおしむにあらざれども、眼耳ふさがれて見聞することあたはざるなり、身識いまだおこらずして了別することあたはざるなり。無相三昧の形如滿月なるを望見し礼拝するに、目未所覗なり。仏性之義、廓然虛明なり。しかあれば、身現の説仏性なる、^{*虚明}なり、廓然なり。説仏性の身現なる、以表諸仏体なり。いづれの一仏二仏か、この以表を仏体せざらむ。仏体は身現なり、身現なる仏性あり。四大五蘊と道取し会取する仏量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸仏体といふ、蘊処界のかくのごとくなるなり。一切の功德、この功德なり。仏功德は、この身現の究尽し囊括するなり。一切無量無辺の功德の往来は、この身現の一造次なり。しかあるに、龍樹・提婆師資よりのち、三国の諸方にある前代後代、ままに仏学する人物、いまだ龍樹・提婆のごとく道取せず。いくばくの經師・論師等か、仏祖の道を蹉過する。大宋國むかしよりこの因縁を^{*}画せむとするに、身に画し、心に画し、空に画し、壁に画することあたはず、いたづらに筆頭に画するに、法座上に如鏡なる一輪相を図して、いま龍樹の身現圓月相とせり。すでに數百歳の霜華も開落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし。あはれむべし、万事の蹉跎たることかくのごときなる。もし身現圓月相は一輪相なりと会取せば、真箇の画餅一枚なり。弄他せん、笑也笑殺人なるべし。かなしむべし、大宋一国の在家出家、いづれの一箇も龍樹のことばをきかずしらず、提婆の道を通ぜずみざること。いはんや身現に親切ならんや。圓月にくらし、満月を虧闕せり。これ稽古のおろそかなるなり、慕古いたらざるなり。古仏新仏、さらに真箇の身現にあふて、画餅を賞翫することなけれ。しるべし、身現圓月相の相を画せむには、法座上に身現相あるべし。揚眉瞬目それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり。破顔微笑つたはるべし、作仏作祖するがゆへに。この画いまだ月相ならざるには、形如なし、説法せず、声色なし、用辨なきなり。もし身現をもとめば、圓月相を図すべし。圓月相を図せば、圓月相を図すべし、身現圓月相なるがゆへに。⁽¹²⁾圓月相を画せむとき、満月相を図すべし、満月相を現すべし。しかあるを、身現を画せず、圓月相を画せず、満月相を画せず、諸仏体を図せず、以表を体せず、説法を図せず、いたづらに画餅一枚を図す。用

什麼。⁽¹³⁾これを急著眼看せむ、⁽¹⁴⁾たれか直至如今飽不飢ならむ。月は円形なり、円は身現なり。円を学せむに、一枚錢のごとく学することなかれ。⁽¹⁵⁾*一枚餅に相似することなかれ。身現円月身なり、形如満月形なり。一枚錢・一枚餅は円に学習すべし。

予、雲遊のそのかみ、大宋国にいたる。嘉定十六年癸未秋のころ、はじめて阿育王山広利禪寺にいたる。西廊の壁間に、西天東地三十三祖の変相を画せるを見る。このとき領覽なし。のちに宝慶元年乙酉夏安居のなかにかさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予、知客にとふ、「這箇是什麼變相。」知客いはく、「竜樹身現円月相。」かく道取する顔色に鼻孔なし、声裏に語句なし。予いはく、「真箇是一枚画餅相似。」ときに知客大笑すといへども、笑裏無刀、破画餅不得なり。すなはち知客と予と、舍利殿および六殊勝地等にいたるあひだ、数番拳揚すれども、疑著するにもおよばず。おのづから下語する僧侶も、おほく都不是なり。予いはく、「堂頭にとふてみん。」ときに堂頭は大光和尚なり。知客いはく、「他無鼻孔、対不得、如何得知。」ゆへに光老にとはず。恁麼道取すれども、桂兄も会すべからず、聞説する皮袋も道取せるなし。前後の粥飯頭、みるとあやしまず、あらためなほさず。又、画することうべからざらん法は、すべて画せざるべし、画すべくは端直に画すべし。しかるに、身現の円月相なる、かつて画せるなきなり。おほよそ仏性は、いまの慮知念覚ならんと見解することさめざるによりて、有仏性の道にも、無仏性の道にも、通達の端を失せるがごとくなり。道取すべきと学習するもまれなり。しるべし、この疎怠は癪せるによりてなり。諸方の粥飯頭、すべて仏性といふ道得を、一生いはずしてやみぬるもあるなり。あるいは、聽教のともがら仏性を談ず、参禪の雲衲はいふべからず。かくのごとくのやからは、真箇是畜生なり。なにといふ魔儻の、わが仏如來の道にまじはりけがさんとするぞ。聽教といふことの仏道にあるか、参禪といふことの仏道にあるか。いまだ聽教・参禪といふこと、仏道にはなしとしるべし。

竜樹段如く文、シルヘシ、真箇ノ用辨ハ声色
ノ即現ニアラス、真箇ノ説法ハ無其形也云々、
打任テハ説法ハ三業ノ内口業ノ能ナリ、説法
はたらきである。「説法」はまた上聖が下位に受けさせる姿である。そうであれ

ハ又上聖ノ下位ニカウフラシムル姿也、然者尤用辨モ其形アルヘシ、今文違普通ノ存知、但真実ノ説法ノ道理必用辨アルヘカラス、草木山河等モナトカ説法ノ道理ヲ背カム、然者又無其形ナル義非可驚、尊者カツテ広仏性ヲ為説スル不可数量也、覽一隅ヲ略舉スル也云云、実童樹ノ一代仏性ヲ為説シ給ツラム、サコソハアリツラメ、千部ノ為論師、^{アラハ}広大ノ為説非可レ疑、略^{アラハ}舉（一三八b）一隅^{アラハ}トハ右ニ所^{アラハ}載之詞ヲ指也、汝欲見仏性先須除我慢トコソ為説ノ宗旨スコサス辨肯スヘシ云云、打任テ此文ヲ心得ルニハ、仏性ヲ見ト思ハハ先我慢ヲ可^{アラハ}除、慢ト云ハ凡惱也、雲ノ月ヲ如^{アラハ}覆、此我慢ヲ具足スルニヘニ不^{アラハ}見^{アラハ}仏性也、仍此慢ヲ除ハ見ヘシト思ヘリ、是邪見也、仏性ノ義タニモ談シ、仏性ノ道理タニモアラハルレハ、理トシテ除我慢ノ義アラハル也、喻ヘハ諸惡ヲ莫作ト談セシカ如シ、故見ハナキニアラス、ソノ見コレ除我慢也ト文、所詮仏性ヲ指テ除我慢トハ名タリ、汝欲見仏性ノ見ハナキニア（一三九a）ラス、此見是除我慢也ト云、此見ヲ能見所見ノ如ニ心得ル邪見也、此見ヲヤカテ仏性ト心得ル也、我モ非^{アラハ}慢モ多般也、除法又万差ナルヘシトアリ、先須除我慢ノ我、先須除我慢ノ慢、先須

ば、当然「用辨」も其の形（其形）があるはずである。こここの文は、普通の存知（知る）とは違う。しかしながら、真実の説法の道理は、必ずしも「用辨」があるとは限らない。草木山河等「の無情」も、どうして「説法」の道理に背くであろう。「無情説法」ということがあるではないか。」そうであるから、また「無其形」（其の形無し）であることは驚くべきではない。「尊者かつてひろく仏性を為説する、不可数量なり。しばらく一隅を略舉するなり」とある。實に童樹の一代は、「仏性を為説」されたということであるが、きっととそうなのであろう。千部の論師で、^{アラハ}広大なる「為説」は疑うべきではない。「一隅を略舉」とは、右に載せるところのことばを指すのである。「汝欲見仏性、先須除我慢とこそ為説の宗旨、すこさず辨肯すべし」とある。普通一般にこの文を理解するに、「『仏性を見んと欲ば、先づ〔須く〕我慢を除くべし。』『慢』と言うのは煩惱である。そこで、この『慢』を除けば見ることができる」と思つてはいる。これは邪見である。せめて仏性の意味だけでも説き、仏性の道理だけでもあらわれたら、理でもつて「除我慢」⁽¹⁹⁾の意味があらわれるのである。例えば、諸惡を莫作と説くようなものである。だから「見はなきにあらず、その見これ除我慢なり」と言うのである。結局、「仏性」を指して「除我慢」と名付けたのである。「汝欲見仏性」の「見はなきにあらず、その見これ除我慢なり」と言う。この「見」を、能見・所見のように理解するのは邪見である。この「見」をそのまま「仏性」と理解するのである。「我もひとつにあらず、慢も多般なり、除法また万差なるべし」とある。先須除我慢の「我」、先須除我慢の「慢」、先須除我慢の「除」、これらは皆異なる法と理解してはいけない。ただ仏性の上の莊嚴である。だから、「見」も「我」も「慢」

除我慢ノ除、是等皆各各法ト不可ニ心得、只
仮性ノ上ノ莊嚴也、故見モ我モ慢モ除モ皆仮
性ト可ニ心得、故是等皆見仮性ナリ、眼見目覗
ニナラフヘシト文、眼与目ハ只同物也、眼ニ
見ト云モ、目ニ覗ト云モ只同事也、此定ニ汝
欲見仮性先須除我慢ノ一詞一一義皆仮性也
ト可ニ心得也、仮心性非大非小尋常ノ凡夫
二乘ニ例諸スル事ナカレ、（一三九b）偏枯
ニ仮性ハ廣大ナラムトノミ思ヘル、邪念ヲ蓄
ヘ来ルナリ、非大非小サラム正当恁麼時ノ
道取ニ墨礙セラレム道理、今聽取スルカ如ク
故、シハラク尊者ノ道著スル偈ヲ聞取スヘシ
云云、實ニモ仮性ハ只大ナラムスルトノミ多
分思ヘリ、仮性不可爾、大ニアラス小ニア
ラサラム正当恁麼時ノ道取ニ墨礙セラレム道
理、今聽取スルカ如ク思量スヘシタルハ、
大小ニアラサラム時ノ道取ニ墨碍セラレム道
理、今聽取スルカ如クトハ、非大非小詞ヲ聽
取スルカ如ク思量スヘシタル也、思量ナ
ル聽取ヲ（一四〇a）使得スルカ故ニトハ、
此非大非小正当恁麼時ノ道取ヲ思量ノ聽取ヲ
使得スヘシトナリ、身現円月相以表諸仮体也、
ステニ諸仮体ヲ以表シキタレル身現ナルカ故、
円月相也云云、身現円月相ト云ヘハ、マロク

も「除」も、皆仮性と理解すべきである。だから、「これらみな見仮性なり、眼見
目覗にならふべし」とある。「眼」と「目」とは同じものである。眼で見る（眼
見）というのも、目で覗る（目覗）というのも同じことである。このように、「汝
欲見仮性、先須除我慢」のそれぞれのことば、それぞれの意味は、皆仮性である
と理解すべきである。「仮性非大非小「等の道取」、よのつねの凡夫二乗に例諸す
ることなれ。偏枯に仮性は廣大ならむとのみおもへる、邪念をたくわへきたる
なり。大にあらず小にあらざらむ正当恁麼時の道取に墨碍せられむ道理、いま聽
取するがごとく思量すべきなり。思量なる聽取を使得するがゆへに、しばらく尊
者の道著する偈を聞取すべし」とある。本当に仮性はただ大きいだろうとのみ大
部分「の者は」思っている。仮性はそうであるはずがない。「大にあらず小にあ
らざらむ正当恁麼時の道取に墨碍せられむ道理、いま聽取するがごとく思量すべ
し」とあるのは、大小ではないときの「道取に墨碍せられむ道理、いま聽取する
がごとく」と言うことであり、それだから、「非大非小」のことばを「聽取する
がごとく思量すべし」とあるのである。「思量なる聽取を使得するがゆへに」と
は、この「大にあらず小にあらざらむ正当恁麼時の道取」を、「聽取するがごと
く思量し」思量である聽取を使得すべきであるといふのである。「身現円月相、
以表諸仮体なり。すでに諸仮体を以表しきたれる身現なるがゆへに、円月相な
り」とある。「身現円月相」と言えば、円く鏡のようである身を現されるよう
に理解するがそうではない。ただ、龍樹の身の欠けたところがなく、無边际である
姿を、「円月相」と説くのである。「以表諸仮体」（以て諸仮の体を表す）とあるが、
「以表」とは、本をおいてその姿に相似であるのを、普通一般には「以表」と思
つてている。これは、そのことではない。「諸仮体」を「以表」と名付けたのであ

鏡ノ如ナル身ヲ現シ給様ニ心得ル非爾、只
竜樹ノ身カケタル所ナク、無边际ナル姿ヲ円
月相トハ談スルナリ、以表諸仏体トハ、以表
トハ本ヲ置テ其姿ニ相似ナルヲ打任テハ以表
トハ思ナラハシタリ、是ハ非ニ其儀、諸仏体
ヲ以表トハ名タリ、ヤカテ竜樹ノ竜樹ヲ以表
ストモ可ニ心得^二、又竜樹諸仏体ヲ（一四〇b）
以表スル時ハ、諸仏体ハ藏身ストモ可ニ心
得^二、又シカアレハ、一切ノ長短方円、コノ身
現ニ學習スヘシト云云、實長短方円ノ詞ニ
煩^{ハシ}テ、或長ク或短ク或円ニ或ヨホウナルナ
ムト云凡情ヲ止テ、此円月相ノ円ヲ心得ル定
ニ可^レ学トナリ、身ト現トニ転疎ナルハ、円
月相ニクラキ道理可ニ顯然^一、又愚者思ハクハ
トテ被^レ訛御詞如^レ文、何ノ所何ノ時力、非身
ノ化現ナラムト云云、竜樹ノ虧^{カクルカ}闕ナキ道理ア
キラケシ、又此時尊者ハ高座セルノミ也云云、
普通ニ思ナラハシタル（一四一a）円月相ニ
アラサル証拠顯然也、又身現ハ方円ニ非、有
無ニ非、隱^{ハシ}顯^ニ非、八万四千蘊ニ非、只身現
ナリト云云、如^レ文、無^ニ別子細、円月相ト云、
這裏是甚麼処在、說^レ細說^レ麤^ム月也文、是ハ古
キ詞也、祖師覩^{モチアソブ}月之時、如^レ此イヒシナリ、
所詮此心地ハ、月ト談スル時ハ法界ノ内外皆

る。まさに、竜樹が竜樹を「以表」するとも理解すべきである。また、竜樹が
「諸仏体」を「以表」するときは、竜樹はかくれ、「諸仏体」が竜樹を「以表」す
るときは、「諸仏体」は藏身する（かくれる）とも理解すべきである。また、「し
かあれば、一切の長短方円、この身現に學習すべし」とある。本当に、「長短方
円」のことばにとらわれて、或いは長く、或いは短く、或いは円に、或いは方形
であるなどと言う「が、そのような」凡夫の考えを止めて、この「円月相」の円
を理解するように学ぶべきであると言うのである。「身と現とに転疎なるは、円
月相にくらき」道理は顯らかなはずである。また「愚者おもはく」と言つて訛か
れるおことばは、文の通りである。「いづれのところのいづれのときか、非身の
化現ならむ」とある。「この身のほかに、変化身が別にあるのではないから」竜
樹の虧闕がない道理は明らかである。また「このとき尊者は高座せるのみなり」
とある。普通にいつも思つてゐる「円月相」ではない証拠は顯らかである。また
「身現は方円にあらず、有無にあらず、隱顯にあらず、八万四千蘊にあらず、た
だ身現なり」とある。文の通りである。特にとりたてて論じることはない。「円
月相といふ、這裏是甚麼処在、說^レ細說^レ麤^ム月⁽²⁰⁾（這裏是れ甚麼の処在ぞ、細と説き、麤と
説く月）なり。」これは古いことばである。祖師が月をめでるとき、このように言
つたのである。結局この意味あいは、月と説くときは法界の内外が皆月である。
月ではない一法があるはずがないから。「どのようなどころを細と説き、麤と説
くのか」（這裏是甚麼処在、說^レ細說^レ麤）と言うのは、細も月、麤も月である。月では
ないどころがない道理を説くことばである。「円月相」の意味はこれに同じであ
る。「この身現は先須除我慢なるがゆへに竜樹にあらず、諸仏体なり」とある。
この「身現」の姿を「先須除我」と言うのであるから、この時、仮りに「竜樹に

月也、非^レ月ル一法不^レ可^レ有故、是ハ是イカナル所ヲサイトトキソトトクト云ハ、細モ月麿モ月ナリ、非^レ月所ナキ道理ヲ説詞也、円月相義同^レ之、此身現ハ先須除我慢ナル力故非^ニ竜樹^二、諸（一四一-b）仏体也云云、此身現ノ姿ヲ先須除我ト云故、此時ハ贊非^ニ竜樹^二トイフ道理アルヘシ、是只諸仏体也、又竜樹ニアラス諸仏体ニ非只先須除我也ト云道理モアリヌヘシ、又以表スルカ故諸仏体ヲ透脱ス、シカアルユヘニ仏辺ニカカハレスト云云、諸仏体ヲ透脱スト云ヘハトテ、竜樹諸仏ニ勝ルトハ不^ニ心得^一、竜樹比丘形ノ菩薩ナルトキハ、諸仏体ヲ透脱ストハ難^ニ心得^一、竜樹諸仏体ヲ以表スルヲ、シハラク透脱トハ云歟、非^ニ勝劣之儀^一、所詮竜樹ハ竜樹ヲ透脱シ諸仏体ハ諸仏体ヲ透脱ストモ可^ニ心得^一歟、此道理ヲ仏辺ニカカハレス（一四二-a）トハイハルルナリ、仏辺ニカカハリストハ、正辺ノニヲ置テ談スル儀ニテハアタルヘカラス、今ノ透脱ノ義、仏辺ニハカカハラヌ義也、又仏性満月ヲ形如スル虛明アリトモ、円月相ヲ排列スルニ非云云、是ハ仏性ノ満月アキラカ也ト云トモ只円月相マロキ姿ヲナラヘ置タル様ニハ不^レ可^レ有也ト云云、イハムヤ用辨^一モ声色ニ非ス、身現五蘊十八界等事也、

モ色心ニ非ス、蘊処界ニ非トモ文、是則円月

「あらず」という道理があるはずである。これはただ「諸仏体」である。また、「竜樹にあらず、諸仏体にあらず、ただ先須除我なり」と言う道理もあるにちがいない。また、「以表するがゆへに諸仏体を透脱す。しかあるがゆへに仏辺にかかれれず」とある。「諸仏体を透脱す」と言うからと言つて、竜樹が諸仏に勝るとは理解しない。竜樹が比丘形の菩薩であるときは、「諸仏体を透脱す」とは理解し難い。竜樹が「諸仏体」を「以表する」のを、假りに「透脱」と言うのか。勝劣のことではない。結局、竜樹は竜樹を透脱し、諸仏体は諸仏体を透脱するとも理解すべきか。この道理を「仏辺にかかれれず」と言われる所以である。「仏辺にかかれれず」と言うのは、正と辺の二つをおいて説くやり方ではあるはずがない。ここに「透脱」の意味は、仏辺にかかわらない意味である。また、「仏性の満月を形如する虚明ありとも、円月相を排列するにあらず」とある。これは、仏性が満月「のよう」に明らかであると言つても、ただ「円月相」の円い姿を列べ置いてある様子ではあるはずがないと言うのである。「いはんや用辨も声色にあらず、身現も色心にあらず、蘊処界^一五蘊十八界等のことである」にあらず」ともある。これがそのまま「円月相」であるから。また、「蘊処界に一似なり」といへども、以表なり、諸仏体なり。これ説法蘊なり、それ無其形なり。無其形さらには無相三昧なるとき身現なり」とある。これは、「以表なり」「諸仏体なり」「説法蘊なり」「無其形なり」「無相三昧なり」と、一一あげられ、これらが「蘊処界」等に「一似」である（全く似ている）ようであるが、そうではない理由を釈かれるのであると理解すべきである。

相ナル故、又蘊処界ニ一似也ト云ヘトモ、以表ナリ、諸仏体也、コレ説法蘊也、ソレ無其形也、無其形サラニ無相三（一四二-b）昧ナルトキ身現也云々、是ハ以表ナリ、諸仏体也、説法蘊也、無其形ナリ、無相三昧也ト一一被^レ拳^レ之、是等体処界等ニ一似ナル様ナレトモ、不^レ爾之由ヲ被^レ釈也ト可ニ心得、

又一衆今円月相ヲ望見スト云ヘトモ、目所未見ナルハ説法蘊ノ転機也、現自在身ノ非声色也、即^レ隱即現ハ輪相ノ進歩退歩也云々、一衆円月相ヲ望見スルニ、目所未見ナルハ説法蘊ノ転機也トハ、竜樹ノ上座シテ説法シ給姿カ、目所未見ノ道理ナルナリ、竜樹ハ高座シ給ヲ大衆不（一四三-a）見トハ不^レ可ニ心得^レ也、現自在身ノ非声色ト云ヘハトテ、不思議ナル身ヲ現シ給ニテハナシ、只高座説法ノ姿ヲ現自在身ト名タリ、即隱即現ハ、輪相ノ進歩退歩ト云ハ、打任テハ竜樹高座説法ノ姿ハ円月相ニテ、説法無其形用辨非声色ノ文ヲ説テ後ハ、輪相ハ^{ヨキヨウ}隱レテモトノ僧形ノ竜樹ニテ坐給ト心得也、非^レ爾、只以^ニ竜樹説法僧形ノ姿^ニ円月相ト談上ハ、高座へ上、高座ヨリ下給姿ヲ輪相ノ進歩退歩ト^レ贅談^レ之也、又復於座上現自在身ノ正当恁麼時ハ、一切衆会、唯聞法音スル也、不覗師相也云々、（一四三-b）是ハ竜樹ノ

また、「一衆いま円月相を望見すといへども、目所未見なるは説法蘊の転機なり、現自在身の非声色なり。即隱即現は、輪相の進歩退歩なり」とある。「一衆」が「円月相を望見」するときに、「目所未見なるは説法蘊の転機なり」と言うのは、竜樹が座に上つて説法される姿が「目所未見」（目に未だ見ざる所）の道理なのである。竜樹は高いところに座つておられるのに、大衆は見ないとは理解すべきではないのである。「現自在身の非声色」と言うからと言つて、不思議な身をお現わしになるのではない。ただ高座で説法する姿を「現自在身」と名けたのである。「即隱即現は、輪相の進歩退歩」と言うのは、普通一般には、竜樹が高座で説法する姿は円月相で、「説法無其形、用辨非声色」の偈文を説いた後は、輪相は隠れてもとの僧形の竜樹に戻つてお坐りになつていると理解するのである。そうではない。ただ、竜樹が説法を行なう僧形の姿を円月相と説くからには、高座へ上つたり、高座より下りたりされる姿を「輪相の進歩退歩」と仮りに説くのである。また、「復於座上、現自在身の正当恁麼時は、一切衆会、唯聞法音するなり、不覗師相なり」とある。これは、竜樹が高座で説法する姿が、既に「以表諸仏体」である。だから「不覗師相」（師の相を覗ず）の道理である。「諸仏体」であるからには、仮りに「不覗師相」と説くのか。この次のおことばは、迦那提婆

高座説法ノ姿已以表諸仏体也、故不覩師相ノ道理也、諸仏体上ハ覽不覩師相ト談歟、此次ノ御詞迦那提婆ヲ被讚嘆御詞也、如文、又全座ノ分座ト云事ハ、於靈山摩訶迦葉釈尊ノ法座へ請上テ相並テ座給シ時事也、其以下如文、又天上人間大千法界ニ流布セル仏法ヲ見聞セル前後ノ皮袋、タレカ道取セル、身現相ハ仏性也ト、是ハ仏性ハ理具ノ法也、イカニモ身現ヲサシテ仏性ヲ談スル様如文、又無（一四四a）相三昧ノ形如満月ナルヲ望見シ礼拝スルニ、目未所覩ナリ云々、如前云、只竜樹ノ無相三昧形如満月ナル道理カ目未所覩トイハル也、目所未見ノ道理ニ不可違也、シカアレハ、身現ノ説仏性ナル、虛明也、廓然也、説仏性ノ身現ナル、以表諸仏体也、イツレノ一仏二仏カ、此以表ヲ仏体トセサラム云々、是ハ身現ノ説仏性虛明也、廓然也、説仏性ノ身現ナル、以表諸仏体也ト云ハ、只同道理也、詞ノ前後シタル許ナリ、所詮身現モ説仏性モ以表諸仏体モ虛明モ廓然ノ義モ只一物ナリ、指色色仏性ノ理ヲアラハスト可ニ心得、何（一四四b）ノ仏カ、此以表ヲ仏体セサラムトハ、此以表則諸仏体也、故何仏モ

を讚嘆されるおことばである。文の通りである。また、「全座の分座」ということは、靈鷲山で摩訶迦葉が、釈尊の法座へ上ることを請われて、相い並んで座わられたときのことである。⁽²¹⁾ それ以下は文の通りである。また、「天上・人間、大千法界に流布せる仏法を見聞せる前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は仏性なりと」。これは、仏性は理として具えている法である。決して「身現」をさして仏性を説く道理があるはずがない。ここでは、提婆だけが道取するところを、繰り返し讚嘆されるのである。「余者」が仏性を説くさまは文の通りである。また、「無相三昧の形如満月なるを望見し礼拝するに、目未所覩なり」とある。先に述べたように、ただ竜樹の「無相三昧」の形が満月の如くである道理が、「目未所覩」と言われる所以である。「目所未見」の道理に違うはずがないのである。「しかあれば、身現の説仏性なる、虛明なり、廓然なり。説仏性の身現なる、以表諸仏体なり。いづれの一仏二仏か、この以表を仏体せざらむ」とある。これは、「身現の説仏性「なる」、虛明なり、廓然なり。説仏性の身現なる、以表諸仏体なり」と言うのは、ただ同じ道理である。「身現の説仏性」と「説仏性の身現」と」とばが前後しただけである。結局、「身現」も「説仏性」も「以表諸仏体」も「虚明」も「廓然」の意味も、ただ一つの物である。色々を指して仏性の理を表わすと理解すべきである。「いづれの「一」仏「二」仏か、この以表を仏体せざらむ」というのは、この「以表」が即ち「諸仏体」である。だから「いづれの仏」もこの「以表」を「仏体」とすると言うのである。また、「仏体は身現なり、身現なる仏性あり。四大五蘊と道取し会取する仏量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸仏体といふ、蘊処界のかくのごとくなるなり」とある。文の通りである。ただ結局、「四大五蘊と道取し会取する仏量祖量も」、皆「身現」である。「蘊処

此以表ヲ仏体トセリトナリ、又仏体ハ身現ナリ、身現ナル仏性アリ、四大五蘊ト道取シ会取スル仏量祖量モ、カヘリテ身現ノ造次也、ステニ諸仏体ト云フ、蘊処界ノカクノコトクナルナリ云云、如レ文、只所詮四大五蘊ト道取シ会取スル仏量祖量モ、皆身現ナリ、蘊処界等モ諸仏体也ト可ニ心得也、此次ハ無ニ別子細、如レ文可ニ心得、又大宋国昔ヨリ此因縁ヲ画セムトスムニ、身ニ画シ、空ニ画シ、壁ニ画法（一四五a）座上ニ如鏡ナル一輪相ヲ図シテ、今竜樹ノ身現円月相トセリ云云、是ハ此スル事アタハス、イタツラニ筆頭ニ画スルニ、空ニモ壁ニモ何不レ被レ画、只筆頭ニテ座上ニ如鏡ナル一輪相ヲ図シテ、今竜樹ノ円月相トスル事ヲ被レ嫌也、已下如レ文、金屑トハ金ノスリクツ也、金ハユニシキ重宝ナレトモ、スリクツヲ目ニ入ヌレハ難堪、其喻也、此次又如レ文、返返モ円月相ト云ニ付テ画餅一枚ヲ図シタル事ヲ被レ嫌也、此次如レ文、シリヘシ、身現円月相ノ相ヲ画セムニハ、法座上ニ身現相アルヘシ、揚眉瞬目ソレ端直ナル（一四五b）ヘシ、皮肉骨髓正法眼藏、必兀座スヘキナリ、破顔微笑ツタハルヘシ、作仏作祖スルカニヘニ、コノ画未月相ナラサルニハ、

界」等も「諸仏体」であると理解すべきである。この次は、別にとりたてて論じることはない。文の通りに理解すべきである。また、「大宋国むかしよりこの因縁を画せむとするに、身に画し、「心に画し」、空に画し、壁に画することあたはず、いたづらに筆頭に画するに、法座上に如鏡なる一輪相を図して、いま竜樹の身現円月相とせり」とある。これは、この円月相を画こうとするのに、身でも、心でも画くのに、空にも壁にもどうして画くことができないのか。ただ「筆頭」（筆の先）で「〔法〕座上に如鏡なる一輪相を図して、いま竜樹の〔身現〕円月相」とすることを斥けられるのである。以下は文の通り。「金屑」とは金のすり屑である。金はすばらしい重宝であるけれども、すり屑を目に入れたとすると堪え難い。その喻である。この次もまた文の通り。繰り返し円月相ということに關して、画餅一枚を画いたことを斥けられるのである。この次は文の通り。「しるべし、身現円月相の相を画せむには、法座上に身現相あるべし。揚眉瞬目それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり。破顔微笑つたはるべし、作仏作祖するがゆへに。この画いまだ月相ならざるには、形如なし、説法せず、声色なし、用辨なきなり」とある。これは、「身現円月相」を図として描くときに、ただ法座上に竜樹を画くべきである。これに「揚眉瞬目」も、「皮肉骨髓正法眼藏」さらに「破顔微笑」等も皆具わり、かくれるところがなく完全であるという「ことを述べたことばである。また、「月相ならざるには、形如なし、説法せず、声色なし、用辨なきなり」とある。これは、この「画餅一枚」の「円月相」を図として描くときには、「形如」も「説法」も、さらに「声色」「用辨」等も具わっておらず、欠けていて役に立たないものであると斥けられるのである。また「身現をもとめば、円月相を図すべし」とある。これはとりたてて論じることはない。實にその理由

形如ナシ、説法セス、声色ナシ、用辨ナキ也云云、是ハ身現円月相ヲ図スルニ、只法座上ニ竜樹ヲ画スヘシ、是ニ揚眉瞬目モ、皮肉骨髓正法眼藏、乃至破顔微笑等皆ソナハリ、カクル所ナク満足スル也ト云詞也、又月相ナラサルニハ、形如ナシ、説法セス、声色ナシ、用辨ナキ也云云、是ハ此画餅一枚ノ円月相ヲ図スルニハ、形如モ、説法、乃至声色、用辨等モ不^ニ具足「カケタルイタ（一四六a）ツラ物也ト被^レ嫌ナリ、又身現ヲ求メハ、円月相ヲ図スヘシト云云、是ハ無^ニ子細、實有^ニ其謂、円月相ヲ図セハ、円月相ヲ図スヘシト云云、是ハ只仮性ヲ図セハ仮性ヲ図スヘシ、竜樹ヲ図セハ竜樹ヲ図スヘシト云程ノ道理ナリ、又円月相ヲ画セムトキ、満月相ヲ図スヘシ、満月相ヲ現スヘシト云云、是又同^ニ上道理歟、又シカアルヲ、身現ヲ画セス、円月相ヲ画セス、満月相ヲ画セス、諸仮体ヲ図セス、以表ヲ体セス、説法ヲ図セス、イタツラニ画餅一枚ヲ図ス、用什麼^ニ云云、是ハ竜樹ノ姿ヲアラハサスシテハ如^ニ前云、円月相モ満月相モ、（一四六b）諸仮体乃至以表説法等ヲ図セス、イタツラナルマロキ画餅一枚図シテハ、ナニノ用カアラムト云釈也、竜樹兀坐ノ姿ニ、右ニ所説ノ道理ハ皆具足シタント云心地也、是

がある。「円月相を図せば、円月相を図すべし」とある。これは、ただ、もし仮性を図として描くならば、仮性を図として描くべきである。もし竜樹を図として描くならば、竜樹を図として描くべきであるといふくらいの道理である。また、「円月相を図せむとき、満月相を図すべし、満月相を現すべし」とある。これもまた上の道理に同じか。また、「しかあるを、身現を図せず、円月相を図せず、満月相を図せず、諸仮体を図せず、以表を体せず、説法を図せず、いたづらに画餅一枚を図す。用什麼」とある。これは、竜樹の姿を「書き」あらわさないでは、先に言つたように、「円月相」も「満月相」も「諸仮体」も、さらに「以表」「説法」等をも図として描いていない。役に立たない円い「画餅一枚」を図として描いて、なんの用があろう（用什麼）と言う釈である。竜樹の兀坐の姿に、右に説くところの道理は、皆充分に具わつてゐるという意味あいである。「これを急著眼〔看〕せむ、たれか直至如今飽不飢ならむ」とは、こういう役に立たない月輪を見て、これを信じる者を、誰がこれを満足していると言おうと、言うのである。「直至如今飽不飢」（直に如今に至るまで飽きて飢えず）は、香嚴智闍の悟道のことばである。⁽²²⁾「月は円形なり、円は身現なり」とある。「月」は全く欠けることなく完全である姿を言う。いわゆる、竜樹が兀坐している姿である。これを「月は円形なり」と言う。「円」はまた「身現」の姿である。円を学ぶのに、「一枚錢⁽¹⁶⁾のごとく学することなれ」と斥けられるのである。また、「身現円月身なり、形如満月形なり」とは、竜樹が兀坐している姿を指すのである。「一枚餅」「一枚錢」の「円」も、「身現円月相」の「円」に学ぶべきと言うのである。「予、雲遊」以下のところは文の通りで、とりたてて論じることもない。

ヲ急著眼セム、タレカ直至如今飽不飢ナラムトハ、カカルイタツラナル月輪ヲミテ、是ヲ信セムモノヲハ、誰カ是ヲ満足シタリトハ云ハムトナリ、直至如今飽不飢ハ香嚴ノ悟道ノ詞ナリ文、月ハ円形ナリ、円ハ身現也云云、月ハ只キケツナク満足シタル姿ヲ云フ、所謂竜樹兀坐ノ姿也、是ヲ月ハ円形也ト云、(一四七a)⁽¹⁶⁾ 円ハ又身現ノ姿ナリ、円ヲ学セムニ、一枚餅ノ如ク学スル事ナカレト被レ嫌也、又身現円月身也、形如滿月形也トハ、竜樹兀坐ノ姿ヲ指ナリ、一枚餅一枚錢ノ円モ身現円月相ノ円ニ学スヘシトナリ、予雲遊已下御詞如文無子細、

又シカアルニ身現ノ円月相ナル、カツテ画セルナキ也云云、是ハ身現円月相ナルヲ画シタル事イマタナキ也ト云ナリ、其已下又如文、

或聴教ノ輩談仏性、參禪ノ雲衲不可云ト

云ハ、教家ニヨソノ仏性ト云事ヲハ談スレ、禪門ニハ(一四七b)不可云ト云族^{ヤカウ}ラ有歟、仏法ハ一法也、更教禪ノ差別不可有、仏在世ニモ全ク教ソ禪ソトタテワカテタル事無之、初祖震旦へ渡給テ面壁九年シテ坐禪シ給タリシヲ、壁觀ハラ門ト名ケ、又坐禪ノ禪ノ一字ヲ呼出テ号^{シカシナカ}ニ禪宗^二、是併人師ノ詞也、不可^レ然、仍聴教參禪ト云事、仏道ニハナシ

また、「しかあるに、身現の円月相なる、かつて画せるなきなり」とある。これは、「身現円月相」であるのを画いたことがまだないのであると言うのである。それ以下は、また文の通り。

「あるいは、聴教のともがら仏性を談ず、參禪の雲衲はいふべからず」と言うのは、「教家では仏性ということを説く。禪門では言うはずがない」という族がいるのか。仏法は一法である。決して教と禪の区別があるはずがない。仏在世でも、決して教だ禪だとたてて分けたことはない。「初祖が中国に来られて、面壁九年して坐禪されたことを壁觀婆羅門と名づけ、また、坐禪の禪の一字を取り出して禪宗と号する。」これは、しかしながら「仏祖のことばではなく」人師のことばである。そうであるはずがない。したがって、「聴教・參禪といふこと、仏道にはなし」と斥けられるのである。

トキラハルルナリ、

尊者復於坐上現自在身ト云、是ハ皮肉骨髓仏性也ト云也、

如満月輪トハ、カクル所ナキ故ナリ、月ノ如クニ（一四八a）イタツラニ円ナルトトカハ、非円非方トイフヘカラス、

一切衆会唯聞法音、不覩師相ト云、我声許ヲ以テ法音トハ難^レ云、仍仮性義ヲ法音トイヒ、師相ヲ不見ト云ハ、ステニ現仮性ナレハ、師相ハ不見ナリ、

偈曰、

身現円月相 以表諸仏体
説法無其形 用辨非声色

身現円月相、奥委注^{チウス}也、以表諸仏体ト云ハ、解脱ヲ云歟、超脱スル義也、説法無其形ト云ハ、コノ無、世間ノ無ニアラサルヘシ、真箇ノ説法ハタタ無其（一四八b）形也ト云也、法報応トタツル時、法身ノ仏、説法スヤトタツヌル事アリ、或説法ストイフ、此義ヲ云ニハ、法身モ報応ヲ具シタレハ、法報応タカヒニ具足セサル仏ナシ、ユヘニ説法ストイフ、又説法セストイフハ、ステニ周遍法界如虚空ナムトイフ、ナニ物力説法セムトナリ、此義今ノ無其形ニ似タレトモ、コレニハステニ説

「尊者復於坐上現自在身」（尊者、復坐上に自在身を現す）とある。これは皮肉骨髓が仏性であるというのである。

「如^ニ満月輪」（満月輪の如し）と言うのは、欠けたところがないからである。月のようで、役に立たない円であると説くなれば、非円非方と言うべきではない。「一切衆会、唯聞法音、不覩師相」（一切衆会、唯法音を聞いて、師相を覩す）とある。我が声だけを法音とは言い難い。そこで、「仮性義」を「法音」と言い、「師相」を見ないと言うのは、既に現仮性であるから、「師相」は見ないのである。

偈に曰く。

身現^ニ円月相、以表^ニ諸仏体、（身に円月の相を現じ、以て諸仏の体を表す）
諸法無^ニ其形、用辨^ニ非声色、（諸法其の形無く、用て非声色を辨ず）

「身現円月相」は、後で委しく注釈する。「以表諸仏体」と言うのは、解脱を言うのか。超脱する意味である。「説法無其形」と言うのは、この「無」は世間で用いる無であるはずがない。「真箇の説法」は、ただ「無其形なり」と言うのである。法報応とたてるとき、法身の仏は説法するかと尋ねることがある。ある人は説法すると言う。このことを言うために、法身も報応を具えているから、法報応をたがいに具足しない仏はない。だから説法すると言う。

「また、説法しないと言うのは、既に「周辺法界如虚空」などと言う「のであるから」、どのようなものが説法をするのかというのである。この考えは、ここの「無其形」に似ているけれども、ここでは既に説法をそのまま「無其形」と言う。

法ヲヤカテ無其形トイフ、是ニハ異ナリ、

以表諸仏体ト云ハ、身現ハ除我ナルカユヘニ、
竜樹ニアラス、諸仏体也、仏性ナルユヘニ、
仏体ヲモテアラハスナリ、仏性ハ成仏ト同参
トイフモコノ心ナリ、

\其形ト云ハ、ヤカテカタチアルヲ無トハツ
カフナリ、身（一四九a）現ヲハ尊者ニセサ
セ、説法ヲハ衆会ニカフラシム、コレ尊者ト
衆会ト、能所彼此ノ差別ナキコト也、身現ト
イフ時法界^{ヨウガイ}悉身現也、説法ト云時、尽界皆
説法トイフヘシ、

用辨非声色ト云、コノ非世間ノ是非ノ非ニア
ラス、身現円月相以表諸仏体カヤカテ仏性ニ
テアルトキニ、声色ニアラスト云ナリ、

\色身ノ仏ノ声塵^{チヤン}ヲ以テ説法スルヲコソ用ル事
ナレハ、已ニカレニハ異ナルヘシ、

汝欲見仏性先須除我慢トイフハ、此見ハ悉
(一四九b) 有ヲ仏性ト心得ル様ニ、見ヲ除
我慢トトルヘシ、欲知仏性義ニモアタルヘシ、
見仏性ノ義ヲ談スレハ、除我慢ナルヘシ、

\所詮我ヲ除ケハ仏性ハアラハル、アラハルレ
ハ見ナリ、仏性ナルユヘニ仏体也、仏性ハ成
仏ト同参スト云此心也、

これとは異なつてゐる。

「以表諸仏体」と言うのは、「身現」は「除我」であるから竜樹ではない。「諸
仏体」である。仏性であるから、「仏体」によつてあらわすのである。「第五段の」
「仏性は成仏と同参」（仏性かならず成仏と同参するなり）といふのもこの意味で
ある。

「無其形」と言うのは、そのまま形あることを「無」と使うのである。「身現」
を「尊者」にさせ、「説法」を「衆会」に負わせる。これは、「尊者」と「衆会」
とが能所・彼此の区別がないことである。「身現」と言うときには、法界が悉く
「身現」である。「説法」と言うときは、尽界皆「説法」と言うべきである。

「用辨非声色」とある。この「非」は、世間で使う是非の非ではない。「身現
円月相、以表諸仏体」がそのまま仏性であるときに、「声色にあらず」（非声色）
と言うのである。

「色身の仏（肉体を具えた仏）」が声塵（声）によつて説法するのを取り上げること
であるから、既に法身説法とは異なるはずである。

「汝欲見仏性、先須除我慢」とあるが、この「見」は、「第一段で」「悉有」を
「仏性」と理解するように、「見」を「除我慢」と取るべきである。「第二段の」
「欲知仏性義」にもあたるはずである。「見仏性」の意味を説けば、「除我慢」で
あろう。

「結局、我を除けば、仏性はあらわれる。あらわれれば「見」である。仏性である
から仏体である。「第五段で」「仏性は成仏と同参す」と言うのは、この意味である。

\又此先須除我慢ハ、目所未見耳無所聞ノ詞ニ
思アハスヘシ、ヤスク我慢ハノソカルルナリ、
\見ハナキニアラス、ソノ見コレ除我慢也ト云
フ、此見ハ先須除我慢ノ見ナリ、

又見アリトイハハ、ソノ見、仮性ノ上ニヲク
ヘシ、（一五〇a）

我モ一ニアラストキケハ、多カルヘキカト覺
タレトモ、除我慢トツツキヌル時ニ、コノ我
モ慢モ実アルヘカラス、我モ一ニアラス慢モ
多般也ト云テ、除法マタ万差ナルヘシトアル
トキニ、早ク除セラレヌレハ、一ニアラスト
云モ、多般トイフモ、実ナキ也、大海不宿死
屍ト云詞アリ、是ヲ心得モ死屍ノアルニテハ
ナシ、タタ大海トトク詞ニハ、不宿死屍トカ
ナラスイフ也、コノ定ニ今ノ我慢モアルヘシ、
先須除我慢トイフユヘニ、

汝欲ノ詞ニ先須ヲアテ、除我慢ノ詞ニ見仮性
ヲアツヘシ、又先須除仮性、汝欲見我慢トイ
フ義（一五〇b）アリナムヤ、タトヘハ為法
捨身ハ、為身捨法トイハムカ如シ、我モ一ニ
アラス、慢モ多般也ト云ハ、此レ欲知仮性義
ノ知ヲシラムト思ハハ、トカムト思ハハ、行
セムト思ハハトモ云程ノ見ナリ、當觀時節ノ
詞ニ、我慢ヲノソクヘシノ詞ハアタル、除法

「また、この「先須除我慢」は、「目所未見、耳無所聞」のことばに考え合わせるべきである。容易に我慢は除かれるのである。

「見はなきにあらず、その見これ除我慢なり」とある。この「見」は、「先須除我慢」という「見」である。

「また、見があるというならば、その見は仮性の上におくべきである。

「「我もひとつにあらず」と聞くと、多いだろうかと思われるけれども、「除我慢」とつながったときに、この「我」も「慢」も、実体があるはずがない。「我もひとつにあらず、慢も多般なり」と言つて、「除法また万差なるべし」とあるときには、早く除かれたとすると、「ひとつにあらず」と言うのも、「多般」というのも、実体がないのである。「大海不宿死屍」ということばがある。これを理解するのも、死屍があるのである。「大海」と説くことばには、「不宿死屍」と必ず言うのである。このように、この「我慢」もあるはずである。「先須除我慢」と言うのであるから。

「汝欲」のことばに「先須」をあて、「除我慢」のことばに「見仮性」をあてる事ができよう。また、「先須除仮性、汝欲見我慢」という意味があるのである。「我もひとつにあらず、慢も多般なり」と言うのは、これは、「第一段の」「欲知仮性義」の「知」を、「しらんとおもはば」「とかむとおもはば」「行ぜむとおもはば」とも言うほどの「見」である。「當觀時節」のことばに、我慢を除くべし（須除我慢）のことばは当る。「除法「また」万差なり」と言うのは、「除法」は仮性の体であ

万差也ト云ハ、除法ハ仮性ノ体ナリ、現ハ除⁽²³⁾

我慢也、コノユヘニ現性也、

眼見目覗ト習ヘシト云ハ、先須除我慢ナリ、

眼見目覗トハ云ヘトモ、何ヲ境ニシテ見トハ

トカス、目ニテ見ル法ニテナシ、

教ニモ眼目、冰水ノタトヘトテ、同体異名ノ

コトニモツカフ、(一五一-a)

\マ見ハナキニアラス、ソノ見コレ除我慢也、我モニアラス、慢モ多般也、除法又万差也ト云フ、是ヲフサネテ見仮性トアリ、非大非小、非広^{ヲクニ}非狭^{ヲクニ}、無福無報、不生不死也ト云テ、ステニ全機ノ義ヲアカセハ、我慢イツクニカノコルヘキ、汝欲見仮性ノ所ニ先須除我慢ハヤカテアラハレヌレハ、眼見見覗ニ習フヘシトアルナリ、汝欲見仮性ノ見ナルヘシ、我等カツネノ眼見目覗ニアラス、汝欲見仮性ノ見ニ習ヘトナリ、

仮性ハ仮ノ眼ヲ以テ見ル、人界ヲハ我等カ眼ヲモテ見ル程ニ見ナリ、無能所^ヲトコロヲ、我等カツネノ眼(一五一-b)見目覗ニアラストハ云也、

見仮性ノ見ハ、目所未見ノ詞ヲ見トツカフヘシ、

見聞覺知都^ヲ仮法ニハ不可置、目所未見、耳無所聞、心無所識、身無所住ト云フ、尤有^ニ

る。「現」は「除我慢」である。そうであるから現「仮」性である。⁽²³⁾

「眼見目覗」とならうべきであると言うのは、「先須除我慢」である。「眼見目覗」とは言うけれども、何を対象にして見るとは説かない。目で見る法ではない。

「教家でも眼目、冰水の譬と言つて、同体異名のことにも使う。⁽²⁴⁾

「ここに「見はなきにあらず、その見これ除我慢なり。我もひとつにあらず、慢も多般なり、除法また万差なるべし」とある。これをまとめて「見仮性」とある。「仮性は」「非大非小、非広非狭、無福無報、不死不生」であると言つて、既に全機の意味を明らかにしているので、「我慢」がどこに残るのであろう。「汝欲見仮性」のところに「先須除我慢」はそのままあらわれてしまうので、「眼見目覗にならふべし」とあるのである。「汝欲見仮性」の「見」であろう。我々が平常の「眼見目覗」ではない。「汝欲見仮性」の「見」に習えと言うのである。

「仮性は仮の眼で見る。人界を我々の眼で見るぐらいに見るのである。能所がないところを、我々の平常の「眼見目覗」ではないと言うのである。

「「見仮性」の「見」は、「目所未見」のことばを「見」と使うべきである。

「見聞覺知は、すべて仮法には置くべきではない。「目所未見、耳無所聞、心無所識、身無所住」(目に未だ見ざる所、耳に聞く所無く、心に識る所無く、身に住する所

其謂^一也、仏性ニコソ六識ハ被^レ接事ナシ、

眼ニ見、目ニミルトニナラヘトイフハ、見仏ノ見ニナラフヘシトナリ、尽十方界沙門一隻眼ト云程ノタケ也、又一心欲見仏、不自惜身命ノ心ナルヘシ、身命ヲシマスト云フ事ハ、タタイタツラナル業報ノ衆生ノ肉身ヲ岸ニナケ、トラニクハレヨトニハアラス、身ヲノ（一五二-a）コス所ナク仏性ト体脱スルヲ、不自惜身命トハ云ヘキナリ、

偏枯ニ仏性ハ広大ナラムトノミ思ヘル、邪念ヲタクハフト云ハ、大小ヲアヒシラフニテハナシ、ヤカテ仏性ヲトクナリ、一切衆生ニ具足シタルナムトイフソ、仏性ハ広大ト思ニテアル、都仏性ナラヌ物ナシト談スルトキハ、誰人アリテカ大トモ小トモ判スヘキ、ユヘニ広大ナラムト思ハ、邪念トイハル衆生所具ノ仏性ノ事ヲ非スルナリ、

大ニ非小ニアラサラム正当恁麼時ノ道取ニ墨礙セラレムト云ハ、仏性ニ墨礙セラルトナリ、（一五二-b）

イマ聴取スルカコトク思量スヘキナリ、思量ナル聴取ヲ使得スルト云ハ、聴取スルカコトク思量シ、思量ナル聴取ヲ使ヒウルトイフハ、

無し）とある。もつともそのように説く理由があるのである。仏性に六識はつなげられることはない。「仏性は六識の対象となるものではないから。」

「眼で見、目で覗る」とならえ（眼見目覗にならふべし）と言うのは、「見仏」の「見」にならうべきであると言うのである。「尽十方界沙門一隻眼」と言うほどのことである。また、「一心欲見仏、不自惜身命」（一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず）の意味であろう。「身命を惜まず」と言うことは、単によくない行為の報いとしての衆生の肉身を、岸に投げ、虎に食われよと言うのではない。身を残すところなく仏性と体脱するのを、「不自惜身命」と言うべきである。

「偏枯に仏性は広大ならむとのみおもへる、邪念をたくわふ」と言うのは、大小を取り合わせることではない。そのまま仏性を説くのである。一切衆生に具わつているなどと言う。「仏性は広大」と思うのである。すべて仏性でないものはないと説くときは、誰がいて大とも小とも判断することができるのか。だから「広大ならむ」と思うのは、「邪念」と言われるのであって、衆生が具えている仏性のことを否定するのである。

「大にあらず小にあらざらむ正当恁麼時の道取に墨礙せられむ」と言うのは、仏性に「墨礙」されると言うのである。

「いま聴取するがごとく思量すべきなり。思量なる聴取を使得する」と言うのは、「聴取するがごとく思量」することであり、「思量なる聴取」を使い得る（使得する）と言うことは、このようであれと言うのである。

カクアレトナリ、

\身現円月相以表諸仏体トイフハ、身現ニテ以表諸仏体シヌレハ、悉有仏性ノ義ナリ、仏性ナラヌ衆生アルヘカラス、此身現ハ竜樹ノ所現トハ心得マシ、仏性ノ所現ナリ、コノユヘニコソ一切衆生悉有仏性ト云道理ニハ符合スレ、

身現ハ説法ナリ、シカレトモ説法ヲハ無其形トイヘトモ、身現ノ義無其形トイハバス（一五三a）一切ノ長短方円、コノ身現ニ學習スヘント云フ、非円仏性ヲトクトキ如満月輪トトク、円月相トトク、コノトキ円ヲ解脱スル也、

\イツレノトキカ、非身ノ化現ナラムト云ハ、竜樹ノ本身ヲアラタメスシテ円月相トナルユヘヲトクナリ、化現トイフハイマノ円月相ヲサス也、竜樹身現シテ衆会ニ令見仏性ト心得ル時ハ、サラニ竜樹除我慢ノ義ナシ、又竜樹ノ身現ヲヨソニシテ見ル衆会アラハ、衆会モ除我慢ノ義アルヘカラス、竜樹モ衆生モトモニ身現ナルトキコソ除我（一五三b）慢ノ義ナルヘケレ、カタカタ竜樹ノ円相ハ円相ニアラヌナリ、

身現ヲハ尊者ニセサセ、説法ヲハ衆会ニカフランムレトモ、説法尊者衆会各別ニテ、能所

「身現円月相、以表諸仏体」と言うのは、「身現」によつて「以表諸仏体」したので、「悉有仏性」の意味である。仏性でない衆生はあるはずがない。この「身現」は、竜樹が現れることは理解してはいけない。仏性が現れることがある。そうであるから、「一切衆生悉有仏性」という道理にぴったりと合う。

「身現」は説法である。しかし、説法を「無其形」と言うけれども、「身現」の意味が「無其形」とは言わない。「一切の長短方円、この身現に學習すべし」と言う。円ではない仏性を説くとき「如満月輪」（満月輪の如し）と説き、「円月相」と説く。このとき「円」を解脱するのである。

「いづれのときか、非身の化現ならむ」と言うのは、竜樹の本身を改めないで「円月相」となる理由を説くのである。「化現」と言うのは、ここでの「円月相」をさすのである。竜樹が「身現」して、「衆会」に仏性を見させると理解するときは、全く竜樹の「除我慢」の意味はない。また、竜樹の「身現」をおろそかにして見る「衆会」があるならば、「衆会」も「除我慢」の意味があるはずがない。竜樹も衆生もともに「身現」であるとき、「除我慢」の意味になるだろう。いずれにしても、竜樹の「円相」は「^{まるい}かたち」ではないのである。

アル事ナキユヘナリ、身現ト云へハ悉身現、

説法ト云へハ悉説法ナリ、尽界説法也、

\マノ説法ハ目所未見ト可心得、カク心得ルカ転機ニテハアル也、凡夫ノ見ヲメクラスユヘニ、

\這裏是甚麼処在、説細説麿月ナリト云フハ、ハキヲササケテ、コレイカナル月ソトトク同心也、円月相ノミヲトハサルココロナリ、身ヲ円月相（一五四a）ト云モコレ程ノ事也、諸仏体ヲ透脱スト云ハ、カナラスシモ仏体ニトトマラス、竜樹ノ身現ニテモアルナリ、竜樹ノ身ニテ諸仏体ヲ以表シ畢、諸仏体ヲ以表スレハ、透脱トハツカフナリ、

「這裏是甚麼処在、説細説麿月なり」と言うのは、帚を高くさし上げて、これはどのような月かと説くのと同じ意味である。「円月相」のみをたずねない意味である。身を「円月相」と言うのも、これくらいのことである。

「諸仏体を透脱す」と言うのは、必ずしも「仏体」にとどまらない。竜樹の身現においてもあるのである。竜樹の身で諸仏体を以表しあわる。「諸仏体」を「以表」するので、「透脱」と使うのである。

「仏性の満月ヲ形如スル虛明アリトモ、円月相ヲ排列スルニアラスト云ハ、円月相ヲツラヌルニテハナシ、タタ仏性ナリ、

\用辨モ声色ニアラス、身現モ色心ニアラス、蘊処界ニアラス、蘊処界ニ一似コレ竜樹ノ体ヲイフナリ、（一五四b）

\無相三昧ナルトキト云ハ、コノ無ハ無仏性ノ無ナリ、所詮仏性ノスカタヲトキアラハスナリ、

身現ト云ハ仏性也、悉有也、

(27)

目所未見ナル説法蘊ノ転機ナリ、端ニハ目所

言えば悉く「身現」、「説法」と言えば悉く「説法」である。尽界説法である。

「ここ」の「説法」は「目所未見」と理解すべきである。このように理解するのが「転機」である。凡夫の見解を転らすのであるから。

未見、耳無所聞、心無所識、身無所住トイフ、

コノ目所未見已下ノ詞、今ノ聴衆ノ上ニヲホセテイフカトモ僻見シヌヘシ、不可然、現自身如満月輪ノスカタヲアク、タトヒ目所未見、耳無所聞トハイハルトモ、身無所住トハイカテカ衆会ハイハルヘキ、コレ現自在身ヲ云ナリ（自在身トハ皮肉骨髓）（一五五a）

一切衆生悉有仮性ト心得、コノ衆生ノ身体皆仮性ナラムニハ、能見所見、能聞所聞、能識所識、能住所住アルヘカラス、仮性ト親切ナレハ、不見不聞、不識不住ナリ、目耳心身ヲヲカムトキハ、目ハ尽十方界沙門一隻眼ノ目ナルヘシ、心ハ三界唯心ナルヘシ、身ハ尽十方界真実人体ナルヘシ、耳モ是程ニ心得ヘシ、頂顎眼睛鼻孔舌頭語頭トモ可ニ心得、

サキニハ唯聞法音ト云ヒ、今ハ耳無所聞ト云フ、前後相違ニ似タレトモ、サキノ唯聞モ声ニテハナシ、（一五五b）仮性心ナリ、イマノ耳無所聞モ仮性ノ心ナリ、

即隱即現ハ、輪相ノ進歩退歩ナリト云フ、此輪ハ円ナリツル満月ノスカタヲイフトハコロウマシ、タタ竜樹ノ起居也、本座ニ帰ル義ナリ、

即隱即現ハ、輪相の進歩退歩なり」とある。この「輪」は、円であった満月の姿を言うとは理解してはいけない。ただ竜樹の起居である。本座に帰る意味である。

「即隱即現は、輪相」を隠すと言つても、隠顎に関係しないだろう。隠顎は仮性の意味ではないのである。

聞、心無所識、身無所住」とある。

「この「目所未見」以下のことばは、聴衆に心をお向けになつて言うのかと、かたよつた見方をするにちがいない。そうではない。「現自在身、如満月輪」の姿をあげたのである。たとえ「目所未見、耳無所聞」と言えたとしても、「身無所住」とは、どうして衆会は言えるのか。これは「現自在身」を言うのである。〈自在身と言うのは、皮肉骨髓が仮性であると言うことである〉

「一切衆生、悉有仮性」と理解する。この衆生の身体が皆仮性であるときは、能見・所見、能聞・所聞、能識・所識、能住・所住があるはずがない。仮性とぴつたり一つであるから。不見・不聞・不識・不住である。目耳心身をおくときは、目は「尽十方界沙門一隻眼」の目であろう。心は「三界唯心」であろう。身は「尽十方界真実人体」であろう。耳もこれくらいに理解すべきである。頂顎・眼睛・鼻孔・舌頭・語頭とも理解すべきである。

唯聞法音ト云ハ、無其形ノ説法ヲキタルナリ、

半座ノ尊ナリト云ハ、座ヲワカツト云フ、法ヲツタフルヲ座ヲワカツトイフナリ、ユヘニ又全座ナリ、師弟ノ分程ノ事ナリ、（一五六

a)

全座ノ分座ト云ハ、竜樹ノ皮肉骨髓ヲ得タル事也、

提婆尊者アキラカニ満月相ヲ識此シ、円月相ヲ識此シ、身現ヲ識此シ、諸仏性ヲ識此シ、諸仏体ヲ識此シト云ハ、非_レ示_ニ衆会、目所未見ノ事ヲアカス也、

〔此是尊者現仏性相ナリ、以示我等ト云フ、此示ノ字ハ悉有仏性ノ有ニ心得ナリ、衆会ノ詞ヲモテヤカニ衆会ニ示ス、イハユル目所未見已下ノ詞コレナリ、

「「此是尊者現仏性相、以示我等」（これは是れ尊者現仏性の相なり、以て我等に示す）とある。この「示」の字は、「悉有仏性」の「有」に理解するのである。衆会のことばもそのまま衆会に示す。いわゆる「目所未見」以下のことばがこれである。「此」は衆会のことばである「目所未見、……身無所住」をさし、これが「尊者現仏性相」を示していると言うのである」

「「身ニ画シ、心ニ画シ、空ニ画シ、壁ニ画スルコトアタハス、イタツラニ筆頭ニ画スト云フ、筆ニテノミカカス、此ノコトクカクヘシト也、（一五六 b）

「「急著眼看せむ、タレカ直至如今飽不飢ナラムト云ハ、イソキ眼コヲツケテミヨト云ニテハナシ、ナニニカ眼ヲツクヘキ、能見所見ナキ

「「半座の尊なり」と言うのは、座を分けること。法を伝えることを、座を分けると言うのである。だから、また、「全座」である。師と弟子が分けるほどのことである。

「「全座の分座」と言うのは、竜樹の皮肉骨髓を得たことである。

「「提婆尊者、あきらかに満月相を識此し、円月相を識此し、身現を識此し、諸仏性を識此し、諸仏体を識此「せり」と言うのは、衆会に示すのではない。「目所未見」のことを明らかにするのである。

「「此是尊者現仏性相、以示我等」（これは是れ尊者現仏性の相なり、以て我等に示す）とある。この「示」の字は、「悉有仏性」の「有」に理解するのである。衆会のことばもそのまま衆会に示す。いわゆる「目所未見」以下のことばがこれである。「此」は衆会のことばである「目所未見、……身無所住」をさし、これが「尊者現仏性相」を示していると言うのである」

「「身に画し、心に画し、空に画し、壁に画することあたはず、いたづらに筆頭に画す」とある。筆でのみ書かない。このように書くべきであると言うのである。まさに「急」である。能所をおいて見るならば、「急著眼看」の意味はあるはず

見コソ親切ニ急ナレ、能所ヲキテ見ハ急著
眼看ノキアルヘカラス、右ニ所レ載スル之目所未
見ノ急著眼看ナルヘシ、除我ノ義ナルヲ急著
トツカフヘシ、

\直至如今飽不飢ト云ハ、無能所コレアキテウ
ヘサルナリ、ノコル所ナキユヘニ、

仏道ニ参禪ト云事ナシト云ハ、参禪学道ナム
トツネニ云フコノ詞ノナシトニハアラス、聴教
教ト参(一五七a) 禪セイトヲニタテアハセテ
イフ事ヲ、仏道ニナシトイサメラルルナリ、

近代禪師ノ多イフ義也、不可用、

抑(28)竜樹ノ西天ヨリ南天ヘユキテ仏性ヲ示シマ
シマス事、時刻日数不審ノ專サン一ナリ、甚難カク量、
定一日十日ノ時刻ニカキラサリケム、見仏性
ノ義ヲ只今書ツクル面コソ一旦ナレトモ、彼
時ノ作法難知、汝欲見仏性、先須除我慢トヲ
ヲシヘ大耶ナリヤ、小耶ナリヤノ問ニ付テ、非大非小ノ詞ア
レハトテ、廻タラシテ初心ニソノ理ノ勝タリトキカ
ム事(一五七b) アリカタシ、永嘉真覺大師
ハ一宿シテサトリ、或見桃花、或聞竹響悟道
スルト云モ、已前ノ功勞イカ程ト不知、六
祖ノ八ヶ月ノ功夫モ、ワレラカ懈怠ノ学道ニ
比較セハ、百年千年ニモヤアタルラム、難
知事也、夜半ノ伝衣片時事也、

「「直至如今飽不飢」とあるが、能所が無いのは、飽いて飢えないものである。残るところがないから。

「仏道に参禪ということはない（参禪といふこと、仏道にはなし）と言うのは、「参禪学道」などと常に云う、このことばがないというのではない。「聴教」と「参禪」とを二にたて、合せて言うことを、「仏道にはなし」と諫められるのである。近頃の禪師の多くが言う意味である。用いるべきではない。

「そもそも、竜樹が西インドより南インドへ行つて、仏性をお示しになること、「そのことに関する」時間、日数が疑問の第一である。全く推測できない。きっと一日、一〇日の時間に限らなかつただろ。見仏性の意味を、ただここに書きつける部分は短期間ではあるけれども、その時の状況は知ることが難しい。

「汝欲見仏性、先須除我慢」と教え、「大耶小耶」の問に関して、「非大非小」のことばがあるからと言つて、初心を働かせて考えて、その理がすぐれていると受け取ることはありそうもない。永嘉真覺大師は、「六祖慧能に参じて」一宿して悟り、或いは「靈雲志勤は」桃の花を見、或いは「香嚴智閑は」竹の響を聞いて悟道すると言うのも、「我々は、祖師方の悟道」以前の功勞がどれほどかということを知らない。六祖の「五祖の下での確坊での」八ヶ月の功夫も、我々の懈怠の学道に比較すれば、百年千年にも相当するであろう。知り難いことである。

「五祖から六祖への」夜半の伝衣は、わずかな時間のことである。
がない。右に載せたところの「目所未見」が「急著眼看」であろう。「除我」の意味であるのを、「急著」と使うべきである。

於座上現自在身、如満月輪ト云テハ、一切衆会唯聞法音不覩師相トアルモ不^レ得^ニ其意^ニ、輪相ヲ見ムコソ師相ヨトモイヒツヘシ、

「於坐上現自在身、如満月輪」（坐上に自在身を現す、満月輪の如し）と言つて、「一切衆会、唯聞法音、不覩師相」（一切衆会、唯だ法音を聞いて、師相を覩ず）とあるその意はわからない。「輪相」を見たとして、それが「師相」だとも言うことができよう。

目所未見トアル詞ニハ、不覩師相ハ相応シテ（一五八a）覺ユレトモ、唯聞法音ノ詞ニハ、耳無所聞ノ詞如何、頗^{スコラク}不相應歟、無相三昧トイハムトキモ、形如満月トモナシカハアクヘキ、満月相ナトカ形ナラサラム、又月輪相アラハ非大非小非廣非狹トモトリカタシ、已前ノ段段ヲ心得合スルニ、先須除我慢ト被^レ仰シ初ノ御詞ニコソ仏性ハ顯然ナレ、一切除我慢ナラサラムニハ、仏性ハナニトシテカアラハレム、汝欲⁽²⁹⁾見仏性ノ汝ハ汝ニアラス、誰ニアラヌ道理ナルヘシ、欲見ノ見ハ悉有ノ有ホトノ見ナリ、欲知仏性義（一五八b）ノトキノ欲知ホトノ欲見ナルヘシ、若至若不至既至ナムト心得シ定ニ可ニ心得^レ、所詮竜樹ノ日來ノ形ニ聊モカハラスシテ、袈裟搭シタル僧形ニテ座上ニ着^{チャク}タラムヲ、満月相トモ、円月相トモ可ニ心得^レ、詞コトニ難^レ准^ニ世間ノ詞^ニ、円ノ字アレハトテ、マロナルソトハ努努不可^ニ心得^レ、此外故^シ実アルヘカラス、

「仏性の意味は、世間でも教々に多く説く。今、この『正法眼藏』に撰び載せら

藏ニエラヒノセラルル段段、邪見ノ方ヘモ心得ナサレヌヘシ、サレハ一切衆生悉有仏性ノ仏言ヲモ、(一五九a)衆生所具ノ法ノ様ニ心得ル事勿論也、欲知仏性義ヲモ、時節ヲ置テ向後ヲ待風情ニモ心得、無レ力事也、先師御訓釈コソ解脱ノ詞トモナレ、而此竜樹ノ段ハ、世間ニ心得ナスニ凡不相応ノ詞ノミ、チカヘテ多カリ、是等ヲ先能能可ニ心得^一也、ハシメニ汝欲見仏性、先須除我慢トイフヲモ、汝欲見我慢、先須除仏性トモトリチカヘテ心得ヘキイハレアリ、タトヘハ為法捨身ハ為身捨法トイハムカ如シ、(一五九b)汝欲見仏性トイフ上ハ、ツキノ詞不用得ナリ、又汝ノ詞モ欲見ノ二字ニコモルヘシ、悉有ソ欲知ソトイフホカニ、マタルヘキ所ナシ、見仏性ノ見ノ一字ハ、除我慢ノ除ノ字トヒトシキナリ、

\眼見目覗ニ習ヘシトアルモ、眼ノ所ニ見ヲハツケ、目ノ所ニ覗ツクヘシ、マナコニミルソ、目ニミルソト談スレハ、能所トナリ、眼所対ノ境^{キヤウアリ}トキコユルナリ、除我慢トイフ、コノ心ナルヘシ、(一六〇a)

る各段は、邪見の方へ理解されることもできよう。そうだから、「一切衆生、悉有仏性」の仏のことばをも、衆生が具えているところの法のように「誤つて」理解することは無論「あるの」である。「また」「欲知仏性義」をも、時節をおいて今後を待つ様にも理解する。やむを得ないことである。「だから」先師(道元禪師)の御訓釈は、「そのような邪見からの」解脱のことばともなる。そして、この竜樹の段は、世間「の見方」で理解する時に、おおよそ不相応のことばだけ入り交らせて多い。これらを先ず十分に理解すべきである。

「何はさておき、「汝欲見仏性、先須除我慢」と言うのを、「汝欲見我慢、先須除仏性」と取り替えて理解すべき理由がある。例えば、「為法捨身」は「為身捨法」と言うように。「汝欲見仏性」と言うからには、次のことは用いられない。

「また、「汝」のことばも、「欲見」の二字に入っているはずである。「悉有」「欲知」と言うほかに、その上取るべきことはない。

「見仏性」の「見」の一字は、「除我慢」の「除」の字と等しいのである。

「眼見目覗にならふべし」とあるのも、「眼」のところに「見」をつけ、「目」のところに「覗」をつけるべきである。眼で見る、目で覗ると説くと、能所となれる。眼に対するところの物と思われる所以である。「除我慢」というのは、この意味であろう。

- (1) 『景德伝燈録』卷一 竜樹章(正藏五一・二一〇a-b)を出典としてあげるが、全く一致するというわけではない。
- (2) 『全集』は「虚」とするが『抄』(一三八a)によって「虚」と改めた。以下の本文中の「虚」も同様に改め、その字の左に*を付け、特に註記しない。他の字についても同様である。
- (3) 『全集』は「坐」とするが、『抄』(一三八a)によって「座」と改めた。
- (4) 『全集』はこの割註を欠くが、『抄』(一三八a)によって補った。
- (5) 『全集』は「辨」とするが、『抄』(一三九a)によって「辨」と改めた。
- (6) 『全集』は「しばらく」の上に「いまは」とあるが、『抄』(一三八b)によって削除した。
- (7) 『全集』は「この」とするが、『抄』(一三九a)によって「とこそ」と改めた。
- (8) 『全集』は「ん」とするが、『抄』(一四〇a)によって「む」と改めた。助動詞「む」を『全集』は「ん」とするが、『抄』『聞書』によつて「む」と改め、以下*を付けるのみで特に註記しない。また、『抄』『聞書』に引用されていない部分も改めた。
- (9) 『全集』は「ゑ」とするが、『抄』(一四〇a)によって「へ」と改めた。
- (10) 『全集』は「他」とするが、『抄』(一四一a)『聞書』(一五三b)によって「化」と改めた。
- (11) 『全集』は「なり」の上に「なる」とあるが、『抄』(一四三b)によって削除した。
- (12) 『全集』は「相」を欠くが、『抄』(一四六b)によって補つた。
- (13) 『全集』は「用作什麼」とするが、『抄』(一四六b)によって「用什麼」と改めた。
- (14) 『全集』は「急著眼看」であるが、『抄』(一四七a)は「看」を欠く。しかし『聞書』(一五七a)にはあるから改めなかつた。
- (15) 『全集』は「する」とするが、『抄』(一四七b)によって「せむ」と改めた。
- (16) 『抄』に「円ヲ学セムニ、一枚餅ノ如ク学スル事ナカレ」(一四七b)とあるが、『全集』には「円を学するに、一枚錢のごとく学することなけれ」とある。次には「一枚餅に相似することなけれ」とあり、「一枚錢・一枚餅は円に学習すべし」とあるから、一枚錢についても前に説かれていなければならぬ。『抄』は一枚錢と一枚餅を混同したものと考え、本文は改めなかつた。訳では「餅」を「錢」に改めた。
- (17) 『全集』は「相」とするが、『抄』(一四七b)によって「現」と改めた。
- (18) 『全集』は「あるいはいふ」とするが、『抄』(一四七b)には「或」とのみあるから、「いふ」を削除した。
- (19) 『正法眼藏』諸惡莫作の卷

無上菩提の説著となりて聞著せらるるに転ぜられて、諸惡莫作とねがひ、諸惡莫作とおこなひもてゆく。諸惡すでにつくられずなりゆくところに、修行力たちまち現成す。この現成は、尽地・尽界・尽時・尽法を量として現成するなり。その量は、莫作を量と

せり。正当恁麼時の正当恁麼人は、諸悪つくりぬべきところに住し往来し、諸悪つくる友にまじはるにたりといへども、諸惡さらにつくられざるなり。莫作の力量見成するゆゑに、諸惡みづから諸惡と道著せず、諸惡にさだまれる調度なきなり。(『全集』上 二七八頁)

(20) 『仏果圓悟禪師碧巖錄』卷二には次のように説かれており、傍線部分が相当する箇處と思われるが、ただし、これは月に関して述べたものではない。

後到鹽官会中。請大中作書記。黃檗在彼作首座。檗一日礼仏次、大中見而問曰、不著仏求、不著法求、不著衆求。礼拝当何所求。檗云、不著仏求、不著法求、不著衆求。常礼如是。大中云、用礼何為。檗便掌。大中云、太龐生。檗云、這裏什麼所在、說龐說細。檗又掌。(正藏四八・一五二c)

(21) 『正法眼藏』行持上の卷に、次のように説かれている。

あるいは迦葉、頭陀行持のゆゑに形体憔悴せり。衆みて輕忽するがごとし。ときに如來、ねんごろに迦葉をめして、半座をゆづります。迦葉尊者、如來の座に坐す。しるべし、摩訶迦葉は仏会の上座なり。(『全集』上 一二四頁)

(22)

香嚴の悟道のことばとは、次にあげる『景德伝燈錄』卷一一 香嚴智闍尊の傍線の部分を言うのであるうか。

(前略) 師曰、却請和尚為説。祐曰、吾說得是吾之見解、於汝眼目、何有益乎。師遂歸堂、遍檢所集諸方語句、無一言可ニ

將酬對。乃自歎曰、画餅不可充飢。(正藏五一・二八四a)

しかし、「直至如今飽不飢」であつて一致しない。むしろ『趙州真際禪師語錄』卷中の趙州の示衆のことばの方が適當と言える。或いは、両者を合様したものとも考えることができるよう。

師有時示衆云、老僧初到藥山時、得一句子。直至如今、齁齁地飽。(『禪學叢書』一・四八a)

(23) 突然「現」の字が出て来たが、これは「見」の誤りであろうか。本文に「その見これ除我慢なり」「これらみな見仮性なり」とあるから、「見ハ除我慢也」「コノユヘニ見「仁」性也」とあるべきか。しかし、『聞書』は「見」を「現」の意味に理解したとも考えられるから、改めないでそのままとした。

(24) 『摩訶止觀』卷三上

境之与諦左右異耳、見之与知眼目殊稱、不應別説。(正藏四六・二六b)

『摩訶止觀』卷五上

無明癡惑本は法性、以_二癡迷故法性變作無明、起_二諸顛倒善不善等。如_二寒來結_レ水變_二作堅冰、又如_二眠來變_レ心有_二種種夢。今當_レ体_二諸顛倒即是法性、不_レ一不_レ異。(正藏四六・五六b)

(25) 『正法眼藏』見仏の卷の『聞書』では、次のように述べている。

『正法眼藏抄』口語訳の試み(伊藤)

先見仏ト云ニ付テハ、仏ヲヨソニ置テ、我眼ニテ、仏ノ色相ヲ奉ニ拝見ムスル事ト思フ、是カ大ナル僻見ニテアル也、仏法ニハ能所彼此ノ差別ナキヲ、正見トスルユヘニ、（下略）（『菟成』一三・六一八b～六一九a）

（26）『妙法蓮華經』卷五 如來壽量品第一六

一心欲_レ見_レ仏、不_ミ自惜_ニ身命、時我及衆僧、俱出_ニ靈鷲山。（正藏九・四三b）

（27）傍註として「論歎」とあつたが、「目所未見、耳無所聞……」は、この段の始めの部分にあるから「端」が適當であり、改める必要はないから削除した。

（28）この前で註釈しているのは、「參禪といふこと、仏道にはなしとするべし」で、第七段の最後の箇所であり、ここから後は、他の『聞書』を収めたのであろうか。註（30）（32）で指摘するように、内容的に重複するものもある。

（29）仏性の卷第四段の『聞書』においても、「汝」を同様に註釈している。

汝ト云ヘハトテ、一人ニ仰テ、自他ヲハケテ、童兒ヲ汝ト祖師ノ被_レ仰ニテハナシ、汝ニアラヌ誰ニアラヌ道理也、（一〇三b）

（30）この註釈は、前出の『聞書』（一五〇b～一五一a）と、内容的には同じである。対照して示せば次のようである。上段は前出のもの。

汝欲ノ詞ニ先須ヲアテ、除我慢ノ詞ニ見仏性ヲアツヘシ、又
先須除仏性、汝欲見我慢トイフ義アリナムヤ、タトヘハ為法
捨身ハ、為身捨法トイハムカ如シ、

ハシメニ汝欲見仏性、先須除我慢トイフモ、汝欲見我慢、先
須除仏性トモトリチカヘテ心得ヘキイハレアリ、タトヘハ為法
捨身ハ、為身捨法トイハムカ如シ、

（31）泉福寺本には「ク」とも「リ」とも読める字が書かれており、『菟成』は「ク」と讀んでいる。また『曹全』（註解一・七七a）總持寺本も同様である。しかし、内容から言つて、ここでは、「汝欲見仏性、先須除我慢」を「汝欲見我慢、先須除仏性」と取り替えて言つてるのであるから、「トクチカヘテ」ではなく「トリチカヘテ」とすべきであろう。寛政五年写本・万福寺本（『菟成』二三一・三九c）は「リ」としており、「リ」に改めた。

（32）この註釈も、註（30）の場合ほどではないが、前出の『聞書』（一五一a）と、内容的には同じと言つてよいであろう。同様に対照して示せば次のようである。

眼見目覗ト習ヘシト云ハ、先須除我慢ナリ、眼見目覗トハ云
ヘトモ、何ヲ境ニシテ見トハトカス、目ニテ見ル法ニテナシ、

眼見目覗ニ習ヘシトアルモ、眼ノ所ニ見ヲハツケ、目ノ所ニ覗
ヲツケヘシ、マナコニミルソ、目ニミルソト談スレハ、能所ト
ナリ、眼所対ノ境トキコユルナリ、除我慢トイフ、コノ心ナル
ヘシ、